

## 『コモンズ』第二号 コンセプトの説明

『コモンズ』第二号は「余白」の特集です。

余白とは、一般には紙面の印刷されていない空白部分を指します。余白には書かれた情報をくっきりと見せる役割があります。たとえば古代ローマの石碑を見ると、すべての文字が大文字で書かれ、単語と単語のあいだにスペースがないことがあります。このままでは文字を読むことは困難です。ここでスペースを入れる。余白は地と図を分かťことで、図の部分にくっきりと見せてくれます。

「余白」にあたる英語の「margin」やフランス語の「marge」は、辞書上では「境界」として定義されています。つまり「余り」の「空白」はただの「ブランク」ではなく、私たちの事物の認識を可能にしているものです。そしてこの境界は、知識の更新とともにたえず動いているものでもあります。境界としての余白には、空白であるゆえに、それ自体が意味づけされることはほとんどありませんが、境界のひかれ方は、私たちの知覚する世界像を常に左右します。

これはどういうことでしょうか。「margin」の別の意味、「欄外」と結びつけて考えてみるとよいかもしれません。この意味は「marginalia」という別の語で言い換えられます。この語には「非本質的でない」「付随的」「二次的」といった含意があります。たとえば論文であれば論述から逸脱してしまうため、註に送られるような情報です。

とはいえ、一次的と二次的、本質的と非本質的とを区別させるものは何なのでしょう。それは境界のひかれかたです。例えば論文では、その体裁上、註に「送られ」る記述もありますが、なかには本質的な情報もあります。科学の分野では、実験が成功するまでの試行錯誤の過程が、論文には記されながらも不可欠な「余白」だと見なせるかもしれません。歴史研究では、新しい文書の発見によって、これまでまったく知られていなかった人物や事柄が、突如その時代の代弁者として注目されることがあります。建築の分野では、建物をデザインする視点、建物を含めた環境全体をデザインする視点、生態系の一部として建物をデザインするという視点で、前景化するコンセプトが異なります。境界のひかれ方ゆえに「欄外」におかれたものは、欄内のものよりも見えにくくなり、参照されなくなる。あるいは使われなくなる。ですが、「欄外」は処分されずに生き残り続けているかぎり、来たるべき未来に再び見出されるまで待機状態であり続けることができるのです。発掘され解説されるのを待つ膨大なデータの蓄積は、常に境界を引き直す可能性をはらんでいます。

また日本語では「余白」のカタカナ語である「マージン」という語も一般的に用いられています。これは経済用語で、投機などによって生じた利益分のことをいいます。英語やフランス語では、経済活動に限定されず、必要以上の「余裕」を意味することもあります。余裕としての余白は、分け与えられることもできますし、図と地を反転するならば、逆に器として機能して受け取ることもできます。分け与えたり受け取ったりすることを人間関係に限定する必要はありません。デザインにおける余白は、製作者の配慮と使用者の工夫の両方を許容するものです。都市空間における空き地や原っぱといった目的に特化されない空間は、人間の様々な活動を許容するのみならず、多数の生物の営みの場ともなりえます。つまり「余裕」という意味での「余白」は、出来事としての利他が生ずる可能性としての場だといえるでしょう。

「境界」「欄外」「余裕」。「余白」であるだけに、その意味はこの三つにはとどまらないでしょう。『コ

モンズ』の第二号が、その可能性の展開される場となるべく、投稿を募集いたします。

参考文献：

松井栄一編（2005）『小学館 日本語新辞典』小学館。

高橋作太郎編（2012）『リーダーズ 英和大辞典』第3版、研究社

Beaujean, A. ed. (1990) *Le Petit Littré*, La pochothèque.

Oxford English Dictionary, Lexico, <https://www.lexico.com/> (accessed 10 June 2022)